

ただいま、奄美

奄美大島に、やってきた。大山さん、奥井さんの絵に会いに。二人とも、まさか自分の絵が奄美に帰る日が来るなんて、想像もしなかっただろう。里帰りした絵が、記憶を語り直し、新たに人と人を結ぶ。そんなしあわせなときに立ち会った。



後ろに見えるのが名瀬の立神。展覧会会場の奄美文化センターの裏。ゆっくり歩いて5分程度



編集部=文 text by KOTONONE 岸本 剛=写真 photograph by Tsuyoshi Kishimoto 醍醐実加=イラストレーション illustration by Mika Daigo

1日目 10時

奄美文化センター

空港から中心部の名瀬まで車で一時間。山が多く、長い長いトンネルをいくつも抜ける。来る前は海のイメージが強かったが、車窓にひろがる亜熱帯特有の緑に目を奪われる。奄美文化センターは、名瀬地区のはずれ、ちょうど名瀬港がある入り江のはじまりのあたりにあった。階段を上ると、蔵座江美さんが受付に「一人ちよさんと腰掛けていた。誰も気づいてくれないの」と笑いながら床を指すのを見ると、豚の足あと。奄美出身の大山清長さんが描いた「奄美の豚」がとことこ、歩いてきたという設定。長旅だったから、途中でトイレに寄っていると、芸が細かい。



たまたま奄美を旅行中に立ち寄ったという大学生と話す蔵座さん

蔵座江美さん。ツアー参加者のためだけの贅沢なギャラリートークは、1時間以上になった

蔵座江美さん

今朝、来られた方が二三日奄美を離れて、名瀬の立神が見えると帰ってきたと思うから、何十年も帰ってなかったら、いかほどかかって涙ぐんで話してくださつて。奄美の方にとつてのシンボルなんだなって、今回すごく思いました。家族訴訟(※1)には、五六八人が原告として名乗りをあげていらつしやるんですけど、そのうちの三名しか実名では出てらつしやらない。その中には、二〇代の方もいらつしやるんです。いまでもハンセン病の家族がいるっていうことで、

差別を受けているんですよ。

わたしが訴訟の集会に行ったときにお話を伺った方も、だんなさんのお母さんがハンセン病で、それが理由で仕事を辞めさせられていました。いま、この平成に。今回この訴訟に出ることで、離婚に至った方もいらつしやるそうです。

絵をちよつと見ませんが、はすごく入りやすいと思うんですね。だからすつこいものを遺してくださつたなあと感じて。たくさんの方に見てほしいなあと思っています。



大山清長さんの「奄美風景」。名瀬の立神を記憶で描いている



床にある足あとにご注目

